

日本人の勤勉性

名城大学長

丸 勢 進

Susumu Maruse
President,
Meijo University

天安門事件の少し前、世界銀行の依頼を受けて、中国の教育研究改善の援助のあり方を調査するために、北京のある大学に一月ほど滞在したことがある。周知のように、経済の急激な転換期にあるために、個人の収入面においても、矛盾が山積している。有力教授の集りでも、「息子が今年卒業して就職したら、自分より高い給料である。」とか、「近所のタクシー運転手の収入は、自分の10倍である。」といった話題がさかんであった。私は戦後の同じ経験を思い出し、彼らには、「でも、われわれは貴国の先賢の言葉、君子ハ後レテ楽シムを思って、頑張った。」などと言う一方、政府筋には、「困難でも、対策を急がないと、不測の事態を招きかねない。」と進言していたことを思い出す。

その時、ある旧知の役人から、日本の政府機関に長期に派遣されてから、自国の将来を悲観的に見るようになったという話を聞いた。「以前は、先進諸国の技術と管理の方式を導入することによって、急速に発展できると思っていたが、日本で暮らしてみても、問題はもっと深いところにあることがわかった。例えば、日本の生産工場で見ると、作業員がボタンを押してラインを停止させることは、殆どない。ところが、今日の日本では、ボタンを押したとしても、上司に殴られるようなことはなく、大幅な収入の減少があるわけでもない。また、この勤勉性が国家や民族のためを、熱烈に考えている結果でもない。ラインが止まれば、皆に迷惑をかける。それは皆に悪い、または恥ずかしいという単純な思いが要因である。同じ生産方式を導入すれば、技術水準が十分に高くなったとしても、ラインは停止を繰り返すのみであろう。」「これは現場作業員だけの問題ではない。国のエリートであ



る留学生をみても、給付を増やせば、持ち帰る電化製品等が多くなるだけである。先生は、豊かになれば改善されるとは言われるが、問題点は、異なっている。戦後の困窮時の日本の留学生は、余裕があれば、滞在を延長したり、訪問地を追加して、見聞を広める努力をしたというのではないか。何れも、問題は国家の体制以前のことで、解決の方策は全くない。」

中国の発展に期待をもっている私は、「われわれも大戦直後、対策の見出せない多くの問題を抱えて、日本の将来を悲観視したものであるが、現在の私は、解決の手法がないようにみえても、問題点が何であるかを、多数の人々が一致して認識すれば、必ず解決されていくと信じるようになった。」と励ましたが、顧みると、彼が指摘する日本人の特性が、将来にわたって持続するという保証があるだろうか。個人も社会も蓄積が少なく、科学・技術の奥行きも浅いわが国の将来は、国民の勤勉性にのみ希望がもてるのであって、それを持続させる方策を立てるのが、学校にとっても、企業にとっても最も重要な課題ではなからうか。とくに、関与する人々の意欲と、たゆみない努力に依存する研究開発分野においては、言を俟たない。余暇の充実などという美名のもとに、勤勉性を軽視する浅薄な風潮は誠に危険である。すでに、新刊のフランスの経済書にも、住宅建設を諦めた日本人の貯蓄性向の低下とならんで、外国の悪弊に影響された日本人の勤労意欲の低下傾向を、世界経済の新しい転換の要因として指摘している。1960年代後半の短い年月に、勤勉な国民性を急速に喪失した国々の先例を考えると誠に憂慮にたえない。